

第18回リハビリテーション懸賞作品 第2位

「リハビリと共に」 米田多江

「お仕事は？」と聞かれて、遠慮がちに「ピアノの先生です」と答えると。私の手の変形を知っている人は、一瞬不思議ともあきれたともつかぬ顔をする。それもそのはず、私は身障三級。「一寸見」に分からないかもしれないが、現在の私、両足首強直、左膝亜脱臼、右肘は直角に固定しているから顔に手が届かない。食事も洗面も左手だ。両手首も強直、首も後を向かない。指はリウマチ特有の変形で、指の付根は瘤状に盛り上り、固定して動かない指が四本もある。オクターブどころか右手は五度の音程をとるのがやっと、音階もスラスラ弾けない。こんな手でマア、と我ながら思うのだが、ピアノの先生になって十年。その前にバイオリンの先生を十五年もしていたのである。

私は小学校六年の夏、ちょうど終戦の年に仙台で発病、多発性慢性関節リウマチと診断名が付いた。祖父の遺産である。たちまち歩けなくなり、小学校は何とか卒業できたが、中学は一年であきらめた。あとは弟妹たちの教科書を使って家で勉強し、母におぶさって中学卒の検定試験を受けに行った。高校は通信教育で二半までやったが、仕事が忙しくなって両立が無理となり、健康第一と勉強を中止した。さて、その仕事だが。

身体中を暴れたリウマチは、歩行機能を奪った上に手も駄目にした。寝たきりの日を経て何とか膝でいざって勁けるようになっても、一年中掘りゴタツに腰掛けての暮し。親が生きている間はよいが、その後が問題だ。六人の弟妹に養って賃うことになるのだから、そのためには何か役に立つ物を身につけなくてはならない。

私は学校の教科書の中で、体操の次に嫌いだっただ裁縫を覚え。弟妹と将来できるだろう甥姪の洋服でも縫うしかないと考えた。しかし洋裁学校へ通えないから、母と洋裁の本を先生にして、数年後にはオーバーまで縫えるようになった。戦後の不自由な時代だからリフォームが多かったが。そのために服をほどくのが、服の内部のよい勉強になった。と書くとラクそうだが、手の痛い最中だったから大変、ミシンは何とか踏めたが握力が無いので、鋏は両手で持って裁断し、針も一針一針両手でさしたり抜いたり悪戦苦闘だった、裁ち違いなど失敗も沢山したが、数をこなすのが一番。これで何とか先行きの見通しがついてとても嬉しかった。

私は五歳からピアノを習っていた。子供心にもピアニストを夢みていたから、発病当時は相当弾いていた。ピアノの鍵盤が叩けなくなった代わりに縦笛を吹いていたが、これも右肘が動かなくなって笛の穴に指が届かなくなった。その頃、弟がバイオリンを習

い始めた。小さい楽器だからこれは何とかならないかと手にとったが、これも手首の強直で正常に持てない。でもチェロのように膝の間に挟んで弾けるのを発見、世界で唯一のスタイルでバイオリンを弾いていた。四歳の末の妹が弾きたがったので、この子に一丁手ほどきしてやろうと思った。ところが妹は上達し、二年後市の音楽コンクールに出場させたら入賞したものだから、「家の子にも教えて」と近所から頼まれ、当時のバイオリンブームに乗って、たちまちバイオリンの先生になってしまった。そうなっては変な指導はできないから、本気で指導書をひもといた。年に一回発表会を開き、小編成の弦楽合奏も楽しんだ。もちろん、先生は腰掛けたきりだ。

バイオリンにはピアノ伴奏がいる、妹頼みにしていたが、初歩の曲の伴奏位は何とかならないかなとピアノに向った。バイオリンを弾いている間に指に力がついていて、割合と弾けたのに気をよくし、リハビリのつもりで少しずつ伴奏をした。届かない和音は両指で補い合い、ペダルを上手に使うとそう不自由しないで伴奏できた。

数年後、仙台から四十分程の田舎町から、バイオリンを教えに来てくれと頼まれた。発病して十五年、この頃は片手杖で（松葉杖を使うと肩が痛み出す）何とか立てたが、十メートルと歩けない。週一度どうして通うか。まず弟が自転車の荷台に私を乗せて。駅まで運んでくれた。ホームはおぶってくれ、汽車の中は一人旅、向うの駅には生徒の親たちが迎えに来ていた。こうしてレッスンに一年通ったが、余りに人手をわずらわすのがいやになった。何とかしなければ。

ちょうどその頃、軽四自働車が街に出だした、これだ！、と知人に頼んで乗ってみた。立てない痛い足にもアクセルは軽く、ブレーキは両足で踏めた。曲がった肘も変形した手もハンドルを握るのにちょうどよかった。そこでノークラッチの中古車を買って、ちょうど始まったテレビ自働車学校を見て理論を覚え、知人が松林へつれていってくれて実地練習、そして試験場へ。歩けない者に免状はやれないというのを、試しにと受験させて貰いパス。晴れて限定付免許が取れたが、これも二十年前の時代のせいだ。

車へ乗るまではヨタヨタと人手にすがり、乗れば付き人を助手席に乗せて走る嬉しさ。こうして出がいこをしている間に少しずつ体力が付き、四年後に温泉病院で本格的リハビリを受け、発病後二十年目で杖がとれ、一人歩きができるようになった。

それから四年後、歩けなかった頃からの友人と結婚。仙台から鳴門に移り住んだ。指の訓練に弾くピアノを聞いて、またも近所から頼まれ、今度はピアノの先生になってしまった。十年前と比べると、指は又少し不自由になっているが、自分が習って来た程度は教えられる。忙しい最近の子は、今のところ私の手に余るだけ続ける子はいない。常に一定数の生徒がいるということは、リウマチの手の先生でも、一応の評価はされていると思っている。もっともハンディがあるから月謝は安くしているのが魅力かもしれない

い。ともかくこれまで私の仕事はリハビリと共に来た。

しかし、将来を展望する時、いよいよピアノの先生が無理な時が来るのは考えられる。他の障害者と違ってリウマチ患者は、少しずつ進行する人が多く、無理が効かない。現に私も六年前に再燃して歩けなくなり、又自動車を始めた。一年程で復調したが、常に再燃を考慮せねばならない。だから次々と手を考えた。歩けなかった頃、悪筆を直そうと書道を始めた。正座ができなくても心で書けという先生の言葉が救いだった。これも本気で習って師範の免状でもとれたら、音楽で食べられなくなご)たら役に立つか、との気持ちもあった。二段、三段構えである。

授産所や身障者の職業訓練所があっても、リウマチ患者はなかなか適応できない人が多い。力の要る仕事や流れ作業ができないから。どうしても仕事が少ない。身障者の雇用が叫ばれている中で。リウマチ患者の仕事は又一段と難しいのだ。同病の仲間が集まると、仕事につけない悩みが必ず出る。再燃、手術をくり返したり、進行していく体を持っていると、つい気力が弱くなり、意欲を無くしていく人が多いようだ。幸いに私はよい親と弟妹に恵まれ、身を立てるために頑張れた。今は永久就職もし、理解ある亭主もいるし、身障者としては大変特異な仕事を持ったが、何でもやってみよう、駄目だったら又次の事を考えてと、常に欲深くやって来た。人には何かしらトリエがある、意欲的に自己開発し、花を咲かせてほしい。弱気を起さず何かにとり組み、少しずつ自信をつみ重ねてほしいと、私はいつも仲間と言っている、「私は特別な才能は無いし、頭も悪いし、何もできない」と自分の能力を引き出すどころか、消極的になる人に頑張ってもらいたいから。

今私は、日本リウマチ友の会の徳島支部の事務局を受け持っている。同病の友のために働く事で、神様は私を守って下さると信じている。そして週四日のレッスンの合間に、週に一度、市の消費生活センターの相談員として出勤する。婦人学級で消費者問題の勉強をしたのがきっかけで、消費者団体に加入、活動している間に推された。日常の買物の苦情の処理や指導は机の前の仕事、幸いに体は不自由でも、目、耳、口は達者だ。体を動かす仕事は、私の体を理解してくれる相談員仲間がカバーしてくれる。万が一、又歩けなくなったとしても、囑託のこの仕事なら一応専門職だから、杖をつく身になっても継続させて貰えるかもしれない。例え駄目でも、車を動かさなくなったとしても、家の中で何か又やり出すかもしれない。お金につながらなくてもよいではないか。昔、歩けなかった頃も、「死にたい」と思う前に、何とかしなければと頑張ってきたから、どんな事が来ても怖くない。残された部分を大事にし、それを活用し、気力を充実させよう。明るい笑顔で、健康な人に負けない精神力を作ろう、と身障者の仲間によびかけたい。